

第一部

著者が語る20世紀中国政治史の視角と方法

水羽信男：ワークショップ 20 世紀中国政治史像の再構築，サブタイトルに，学際的・史料学的探求と対話の試みと題して，今日，今から皆さんと一生懸命勉強出来ればと思っております。今日，第一部の方，司会を担当させていただきます広島大学の水羽と申します。先程，ご飯を食べながら言われたんでちょっとドキドキしてるんですが，皆さんの協力で上手く出来ればと思っております。最初に，主催者の側からのお願いとお断りですが，今日のこのワークショップは後ほどブックレットの形でまとめられるそうです。そのために，今日の発言に関しては録音させていただきますので，この点はご了解，宜しくお願いを致します。そしてもう 1 つ茶色い封筒の中，一番下の部分にあるかと思えますけれども，質問用紙というが入っております。今日のタイムテーブルを見たらえれば分かるんですが，3 時から 3 時半まで 30 分，少し長めの休憩をとっておりますが，この休憩の時にこの質問用紙を回収させていただきます。第 2 部，土田先生の司会で討論ということになるわけですが，その時の討論を深めていくために，この質問用紙を活用させて頂きたいと思っております。ですから，今から，第一部，議論を聞きながら思われたことがあれば，この質問用紙の方にメモして頂いて，30 分の休憩で出して頂ければという風に考えています。こちらの方も協力を宜しくお願い致します。それではまず，趣旨説明ということで，大阪大学の田中先生の方からお話をお願い致します。

主旨説明（田中仁）

田中です。まずワークショップのプログラムをご覧ください。「20世紀中国政治史像の再構築 学際的・史料学的探求と対話の試み」をテーマとし、NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点の政治史資料研究班の主催で、大阪大学政治史研究会と「21世紀課題群と中国」大阪大学未来研究イニシアティブが共催するというかたちで開催いたします。

主旨をハンドアウトにまとめましたが、それをもとにすこしお話をさせていただきます。

NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点の政治史資料研究班は、金子肇、松重充浩、土田哲夫、吉田豊子、水羽信男、私の6人で編成しています。校務の関係で欠席の日本大学文理学部の松重さん以外の5人が出席しています。この研究班の課題を、次のように設定しています。考察対象を「短い20世紀」、1920年代から1980年代の中国とし、そして global regional national, local, grassroots の5つの位相を設定して課題の具体化を図っていく。また、ここでの「政治史」には「外交史」と「政治思想史」を含むものとして「政治史」を構想しています。この時期の中国政治は、ロシア革命からソ連解体にいたる20世紀社会主義政治の一環を構成するとともに、両大戦間期から第二次大戦を経て冷戦期にいたる国際政治の枠組みのなかで、「蒋介石の20年」と「毛沢東の30年」がどのような内実を獲得したのかということを検討したいと考えました。ハンドアウトに図を掲げましたが、「蒋介石の20年」の前段階としてのロシア革命から1920年代、「毛沢東の30年」後の移行期としての1980年代までを考察の対象としたいと考えています。

この課題設定に関わる3つの論点ですが、冷戦後東アジア地域秩序の再構築は、冷戦秩序から多国間主義の秩序への転換を背景にして中国における国民統合の論理が社会主義イデオロギーから「中華民族の偉大な復興」への転換や、或いは台湾における競合的政党政治の確立、さらには日本における五五年体制解体から連立政権の模索を伴った時期でありました。こうした環境のもとで、(1)21世紀中国のグローバル大国化に関わる社会科学領域や政

策科学および世界システム論での新たな論点の提示，(2)東アジアのアーカイブズ環境が，日本・台湾・韓国のみならず中国をふくむ東アジア地域社会の質的変容をもたらしつつあること，(3)今日の中国でネット社会化とデジタル資料の蓄積と公開が急速に進み，その結果，国家・社会関係の変容をもたらしていることに注目したとき，「転換期」の日中関係における課題解決のための処方箋の検討と吟味にあたって，「20世紀中国政治史像」の再構築・刷新が，極めて重要な課題であると考えます。

この課題設定には，以下の3つの論点を含んでいます。

第一に，「20世紀中国政治史像」の再構築にあたって，中国の1980年代が極めて重要な意味を有していることです。1980年の中共中央党史研究室・文献研究室設立から，87年の中華人民共和国档案法にいたる過程を，「ポスト毛沢東」の時代が改革開放に転じる中国における制度としての中共党史研究の確立過程と捉えることができるように思われます。すなわち文革後の政治社会秩序再建の一部として，二つの中共党史研究機関の設立がありましたし，さらに档案法の制定は，結党以来の中共関係文書を一方で他の歴史文書と同一の範疇に組み入れるとともに，他方で，中共関係文書をふくむ現用文書と歴史文書の区別に関わる規範の法制化を意味していたからです。同時に，中国の1980年代は，中共党史研究が中共の政治宣伝の一環をなす領域と歴史学の一部としてのそれとに次第に分離していく時期でもありました。

第二に，日本の20世紀中国政治史研究において，人文学と社会科学とをどのように架橋するのかという課題が存在しています。例えば1949年前後の中国を論じた[久保編2006]は人文学系政治史のフロンティアを1950年代に設定しています。また慶應大学出版会が前後して公刊した二つの論著[高橋編2010，山本編2011]は，文学部と法学部という日本の教育制度とそこでの政治史にかかわるアプローチ・方法の相違を対照的に提示することになりました。別の例をあげると，文化大革命研究の未着手という人文学の見方と，それはすでに「一つの山を越えたのかもしれない」という社会科学からの見解との間のすり合わせと検討が必要です。さらに歴史学と諸学との対話について，私達大阪大学中国文化フォーラムの共同研究[田中・三好編

2012]は、地域研究の立ち位置から方法やパラダイムの問題を提起しました。

第三に、史料(資料)論として「20世紀中国政治史像」の刷新を構想することが求められています。すなわち、グローバル化の一部をなす情報革命と社会のネット化とそのもとでの東アジアのアーカイヴズ環境について吟味する必要があるということです。

以上が今回のワークショップの趣旨説明ですが、さらに敷衍的な話をさせていただきます。このワークショップを共催することになった「21世紀課題群と中国」という研究グループについてです。これは今年度大阪大学の学内公募として採択された研究企画(未来研究イニシアティブ・グループ支援事業)で、大阪大学の研究面での強化を図る具体的な提案を求められています。全部で11のプロジェクトが採択されましたが、「21世紀課題群と中国」は大阪大学中国文化フォーラムが提出した企画です。昨日事業報告会があり、お手許にあるのはそこで配布したハンドアウトです。私たちは、「企画のアイデア」として、a.東アジア言語空間、b.21世紀課題群、c.歴史学の刷新の三つの範疇の総合という論点を提出しました。すなわち、a.東アジアの漢語・中国語を第一言語とする世界、さらにもう少し拡大して日本語やモンゴル語、ハングルをふくめたイメージでもよいのですが、そのような言語空間における知的営為が存在すること、つぎにb.21世紀に入ってそれまでとは異なるさまざまな課題、たとえば非対称戦争とテロリズム、新型伝染病と衛生問題等々を視野におさめること、そしてc.これらの課題を束ねるところに歴史学の刷新を位置づけたい、換言すると、社会科学における歴史学と人文学としての歴史学との対話を深めるなかで「東アジア言語空間」と「21世紀課題群」との総合を試みるということです。

ワークショップのもうひとつの共催団体である大阪大学政治史研究会では、法学研究科の同僚である瀧口剛先生を中心に教員と大学院生による研究セミナーを定期的に行っています。

本日のワークショップでは、西村成雄先生の『20世紀中国政治史研究』と、浅野・川井先生編の『概説近現代中国政治史』を素材に20世紀中国政

治史像の再構築に関わる視角と方法 ,およびそれを担保する史資料の意味を考えたいと思います。第一部では ,両著の著者・編者である西村 ,浅野 ,川井三先生に ,著者が語る両著が描く 20 世紀中国政治史の視角と方法 ,政治史の叙述と研究に関わる史資料の意味についてお話しいただき ,さらに瀧口 ,金子両先生に両著を読み解きながら考えたことを提示していただきます。第二部では ,第一部の報告を受けて討論を行うことにいたします。どうぞよろしく願いいたします。

水羽 : ありがとうございます。では第 1 報告 ,西村先生からお願いしたいと思いますが ,一応 ,20 分間という短い時間になっておりますので ,ご協力の方を宜しくお願い致します。

報告（西村成雄）

みなさん、こんにちは。西村でございます。6年前に中之島センターで田中先生企画のシンポジウムがありました。6年ぶりにということで、今回はこういう機会を頂けたことに感謝申し上げたいと思います。

この本は放送大学のテキストとして書いたことにはなってるのですが、今までに私の書いたものも一部使用しています。それからもう1点は、現代のところについては佐々木智弘先生にご分担頂いております。放送大学の規定で私が主任講師ということで、私の名前しか出ておりませんが、これは共著であることをはじめにお断りを申し上げたいと思います。

今日、私はなるべく簡潔に3つの論点を取り上げて、現代中国理解のための解読コードの一端を説明させていただきたいと思います。一部はテキストとも重なりますが、ご容赦をお願いします。

まず第1は現代との対話としての現代中国論という視点が現在、非常に重要になっています。この点については浅野先生、川井先生ご編著の中にも非常に明確にその論点を提起しておられます。

第2点目は実は「100年中国」という20世紀史を1つの歴史的単位として考えてきたことについてです。ある人から、「20世紀というだけでは無内容な概念規定である」と批判を受けています。しかし、西暦という、あたかも地球上の経・緯度のような共通した空間軸との対比で、時間軸の持つ意味が東アジア世界にどのような影響を及ぼしたのかという視点から見ますと、やはり19世紀、20世紀というのはひとまとまりになる歴史的単位ではないかと考えています。内容については、まさにそれはグローバリゼーション、欧米グローバリゼーションのいわば200年であったと言えるでしょう。これを中国に即して「200年中国」論から20世紀中国政治史のあり方をどう捉えたらいいのかという論点としてまとめてみます。

3つ目は、やはり現代日本との対話という意味から、日本の立ち位置の問題をどう捉えたらいいのかということ、或いは学問を支える社会的基盤の持つ意味をもう一度客観化する必要があるのではないかとことです。

そこで、まず第 1 の、現代との対話の課題ですが、これは中国をどう論じるのかという視点を基軸にして、はじめにと書いたレジメの 2 ページ目の座標をご覧頂ければ幸いです。ここでの座標の枠組みは、縦軸に、中国 19 世紀・20 世紀「200 年中国」を基本的にはネイション・ステイト化というグローバル化の枠組みの中にあると捉えた上で、中国の支配的権力の側がどのように自らを位置づけているのかという意味で、ネイション・ステイト化への順応的位置づけ方と、かつての中華帝国、或いは中華世界なのだと捉える枠組みを設定します。横軸は、この「200 年中国」が国際レジームにどのように対応してきたのかということで、能動的にそれに参入しようとするのか、それとも受動的に参入するのかという設定とします。そうすると、むしろ第 3 象限から考えていただければ、受動的参入論の枠組みとしてある種の歴史的自我をもつ政治的磁場が作用しているという意味で、中華世界回帰論的傾向を持つことになります。第 3 象限の中華世界回帰論という言葉については、明確に文言として出しているのが、M.Jacques の *When China Rules the World* の論点です。中国は 8 つの理由からみて近代的なネイション・ステイトではないということを主張しています。第 1 に、19 世紀、20 世紀含めて通常のネイション・ステイトとして存在していない。文明が国家化しているに過ぎないのであって、そういう意味では「文明国家(a civilization-state)」であると規定します。第 2 には、広い意味で朝貢貿易システムに回帰するのではないか、ある意味では中国の軌道に周辺が巻き込まれる。そのことによって、その地域の政治的緊張感が増大するであろう。第 3 に、中国の持つ特徴を、清朝をくぐり抜けたという意味で、少数民族であるエスニック・グループを含んだ中華世界として存在し続けるであろうととらえる。第 4 に、国家経営が大陸サイズであることによって、何故、中国をまとめる求心的な力が働いているのかということを考えざるを得ない。第 5 に、国家組織形態がネイション・ステイトの枠組みではなく、天命論あるいは、天命正統性論という枠組みを基軸にしている。そして第 6 には、変容速度が極めて圧縮されかつ濃縮された時間と空間の中に組み込まれている。第 7 は、中国共産党支配の持続性はかつてのソビエト連邦とは異なる。これ

は基本的には儒教イデオロギーを再生させることによって、何らかの歴史的な統治のテクノロジーが利用されることになるのではないか。そして最後に第 8 として、先進国と発展途上国の 2 つの性格を併存させている。これは今後数十年続くであろうと概括します。そういう中華世界回帰論的な論点が現代中国との対話の中で出ているといえるのかも知れません。

第 2 象限については、これは中華世界領域性の、いわばネイション・ステイト的領域均質支配を実現しようとする上書き現象とでも言っているような、中華世界或いは天下領域の territoriality の持つ意味を近代ネイション・ステイトの territoriality として上書きしたものとして捉える。従って、岩盤或いはその歴史的基盤はむしろ強固に残っていて、そのことによって国際レジームへの受動的参入意識が濃厚であり、新興国的台頭論に傾斜している。だから、ある歴史的条件下では軍事的台頭も辞さないという言説になる。昨日(3月7日)の日本経済新聞のコラムに日中米をどう捉えるかということで、アーサー・ウォルドロンが明確にそのことを書いていました。軍事的に台頭する典型例として中国を位置づける。従って、彼の結論は日本も核兵器を含む軍備を持つ必要があるとする論点になります。これについては、そういうことを辞さないとする勢力が中国の内部に存在するというを前提にしているという意味です。そして、第 1 象限に戻りますと、私の理解ではある意味ではアメリカの中でもアンドリュー・ネイサンらが主張する新たな均衡論的な、つまり、やがて中国を欧米の論理の枠組みの中に組み込み誘導すべきだとする論点として提起して位置づけられます。私は、習近平政権はバランスを取りながらたぶんこの枠組の中で動いているのではないかと思います。にも関わらず第 4 象限としての G2 論が現れておりますから、習近平が言うような意味での「中国の夢」や「新型大国関係論」などもこの象限と関係し合っていると捉えられます。また、この座標軸の第 3 象限は全体として 19 世紀的社会歴史層を象徴し、第 2 象限は 20 世紀的社会歴史層を構成し、第 1 象限は 21 世紀的社会歴史層を蓄積しつつあるともいえるでしょう。そういう意味では現代中国を現代の世界がどのように捉えるのかということを通じては、これ以外にもいろいろな認識のパターンがあることは浅野先生

の最初の概観の中で見事に整理いただいておりますが、どのような現代の視点で中国をどう捉えるかというのは21世紀世界にとって大きなチャレンジであるとならざるを得ない状況にあると思います。以上が第1の論点についての枠組みです。

さて、大きな第2の論点、「200年中国論」に埋め込まれた政治変動のある種の周期性について議論したいと思います。資料1はAngus Maddison推計にもとづくGDPのグローバルな配分比率を図式化したものです。中国が200年をめぐり抜けて、現代、21世紀段階に来ているということの持つ意味を、世界はどう捉えたらいいのかという視点です。ウォーラステインをふまえてキム・ヨンホ(金泳鎬)の設定しているsemi-coreという論理を組み込んで、core, semi-core, semi-periphery, peripheryという四層構造としてとらえなおしてみようと思います。中国は東アジア地域 core の段階からグローバルな periphery 段階へのいわば下降現象として19世紀をめぐりぬけてきたわけです。その下降点を、義和団共同鎮圧にかかわった列強諸国と清朝との国際条約としての辛丑和約締結に見出すことが出来ると考えます。そこから20世紀をかけて復帰するというある種の回帰現象が展開しているととらえます。それは、やはり地域 core からグローバルな semi-core なり或いは core を目指すという方向へ、という傾向性を帯びているのではないかと考えております。こうしたなかで、国際レジームが中国をどのように誘導し得るのかという課題が不確定性、不透明性として表面に出てきている現状があると考えられます。その意味で、資料2の、これはテキストにも書いていますが、20世紀「100年中国」という枠組みの中で、ネイション・ステイト化する過程として捉え直すことが出来ると思います。これは広く取ればやはり「200年中国」全体がそういうものとしてあるという座標を考えております。瀧口先生のレジュメを拝見しますと、その自明性を問うということ提起されております。確かに、中国の権力側も、かつての中華世界の領域、版図をネイション・ステイト化という上書きがなされたと思っていないわけで、その論点のひとつは台湾問題に接続するのではないかと思います。今日、台湾師範大学の邵軒磊先生がお見えであります、まさに中華民国台

湾の存在をどう捉えるかということが、近代ネイション・ステイト形成史の中に、北京の側から見ればなお残っているというのが現状だと思います。その点では、清朝史研究者の歴史認識として、現在、「中国」と言っている中国の自明性は領域的には存在しないという議論が出されています。そういう政治的中国をどうとらえなおすのかという課題があることにも留意する必要があります。

そこで「200年中国」の問題を政治史的にどう再認識するかということとして、再構築には至らないんですけども、1つの試みとして、2番目の20世紀中国だけではなくて、19世紀中国も入れたある種の政治変動の周期性があるということを意識しているわけです。これを一言で言いますと「200年中国」という大きな枠組みの中に2つの「100年中国」があり、そしてそれぞれに実は25年周期をもって1つの政治変動をもたらす動因、様々な諸要因が作用しているのではないかとということです。その場合、1つの動因は政治的正統性を巡る国家と社会の緊張関係にあると考えます。政治的正統性原理を、支配の側がどのように提起し、それを社会の側がどのように受容し、或いはそれにどう抵抗するのかという相互関係性の中に置いた時に、だいたい25年周期という枠組みを観察出来るように思われます。この点については、19世紀中国は、基本的には皇帝の代替わり現象のなかに国内の政治的矛盾および国際的緊張関係が、どのように国内権力政治に内部化されるかという視点に概括されると考えます。1799年乾隆帝の死去からほぼ第1四半世紀の嘉慶期（1820年まで）の時代、第2四半世紀の道光期（1820-1850年）、第3四半世紀は咸豊・同治期（1850-61-75年）を合わせて、そして第4四半世紀の光緒期（1875-98年）と、それぞれの段階で実は国際関係の変容が国内的な政治的緊張関係をもたらす1つの動因として機能しています。ですからアヘン戦争前後で中国近代史の時期区分とする枠組を取り扱う視点がありうるという意味です。19世紀はアヘン戦争で、そして20世紀においては1949年で分期しない、そういう歴史の連続性の中に政治変動の在り方を再定置できないだろうかということです。

更に20世紀中国については、資料2の上段に書いておりますような25

年周期を想定しておりまして、「偶然」ですが、政治家に人格化されたひとつの歴史的まとめりとしての歴史は、孫文の 25 年であり、蒋介石の 25 年であり、毛沢東の 25 年であり、そして鄧小平の 25 年であったという事後観察が可能となります。

21 世紀段階は、2001 年の WTO に加盟したことが中国の現在の在り方を規定しているのではないかと、という意味で、20 世紀段階をもはや超えたところで、新たな段階としての 21 世紀をとらえる視点です。20 世紀中国については、革命と近代化は二者択一的にあるのではなく、革命もあり、近代化もあるというネイション・ステイト形成史として捉えるべきではないかと考えます。従来からの革命史観との対比で鄧小平時代になって一挙に現代化論、近代化論へと収斂しますが、それは、むしろ革命・近代化の併存している構造を示していると考えられます。ヨーロッパにおいても近代ネイション・ステイトの形成史があるわけで、革命史観・近代化史観のないネイション・ステイト論はありえない。ただ 19 世紀日本の存在は近代化論的枠組みで説明可能な状況を示していたといえるかもしれません。この課題は第 3 の論点となる日本の立ち位置の理解と結びつけて考えてみたいと思います。

「200 年中国」という視点を導入しますと、ある種の回帰現象の側面は確かにあるわけで、地域 core としての中国というのは、とくに東アジア世界の構造的的特色であり、そういう意味で日本の近代というのは、そこからの離脱過程でもありました。福沢諭吉の言う「脱亜論」ですが、この枠組みを象徴的に言えば、古代以来の「和魂漢才」の認識パターンにおける「漢」を「洋」に変換すれば「和魂洋才」になり、その構造は変わっていないわけです。だから、容易に、脱亜入欧が可能であったと理解できます。これは、ちなみに福沢諭吉は適塾の緒方洪庵の蘭学を学び、その後、英学こそが西欧の core だとして蘭学から英学へ転換しましたが、これは福沢個人の問題ではないように思われます。日本列島に生まれた政治家・思想家というのは多くは直感的弁別能力があるように思われます。しかし、中国大陸に生まれた政治家は、実は同じような意味で、core mentality に浸されていて、簡単には別の core の periphery へは移行でき

ない。つまり、かつて中枢であったということが基本のメンタリティになっているために、中国大陸に生まれた政治家は、例えば「大一統」、つまり、巨大な政治サイズというものを観念的に否定することは出来ない。だから、「大一統」のもつ意味は、まさに中国的自己呪縛であろうと思います。日本列島でも、周辺の自己呪縛的思考の枠組みは、江戸国学以来の系譜にあるといえるかもしれません。そういう意味では、中国大陸において「大一統」という中枢のイデオロギーを否定するのはきわめて困難な課題です。そこに中国とどう付き合うかという課題が、その論理をどれだけ理解できるかということとの関わり合いの中で考えてゆかなければならないのではないかと感じております。

最後に簡単にご紹介すると、関西大学の陶徳民先生のご研究で、内藤湖南を取り上げられた時に、内藤湖南はやはり近代日本のあり方をみごとに反映した歴史家ではないかとされています。つまり、元中枢である文化中国に対する敬意を払いながら、19世紀以来のグローバルな中枢である欧米との関係性において、欧米に学んで第一次世界大戦後、急速に半中枢的地位を求めた日本が、なおグローバル半周辺の段階にあった中国に対してどう振る舞うかということについては現状肯定的であったととらえるわけです。確かにその側面があります。ですから、大阪大学の田口宏二郎先生の指摘される近代日本という国産の東洋史学としての中国観が基盤にあるととらえられるわけです。こうした、多くは無意識のうちにある中枢・周辺のメンタリティの呪縛に陥いる可能性をもった日本近代自身のあり方を相対化する視角が必要とされています。この課題が、今、200年をめぐり抜けた中国の今日の在り方を見る時のひとつの視角として必要なのではないかと感じています。

21世紀中国を21世紀の日本がどのように説明し、理解するのかという課題をさらに一歩前にすすめるうえで今後、多元的な中国解読コードを発見する必要性がますます増大すると思います。

水羽：ありがとうございます。西村先生の報告、少し時間オーバーになっていますが、続いて、浅野先生にお願いを致したいと思います。20分間ということでご理解をお願い致します。

報告（浅野亮）

ご紹介に預かりました浅野です。ここにお呼び頂きまして非常に光栄に存じますが、「が」がつかます。私の専門は必ずしも近現代史ではなく、今日はここに学びに来たということの方が大きいからです。

もちろん私もレジユメとそれから参考資料を用意してあります。レジユメは1枚。そして参考資料として、『歴史の桎梏を超えて』という本の第13章、最後の章を参考資料としてお配りさせて頂きました。私の専門は中国を巡る安全保障ですが、安全保障を議論する時にどのように歴史学的な知見を活かそうとしたかを示す例です。

2人の知的巨人に挟まれた状態ですので、私がかこのレジユメに書いてあることをそのままなぞって説明するのはやめます。まず私のことをほとんどご存じないと思いますので、先に申し上げますと、私の専門は中国の安全保障ということになっています。最近、まとめさせられた本の『肥大化する中国軍』を阪大に寄贈します。これは、簡単に言いますと、中国の国防費、つまり軍隊を作るお金が必要、これが10年間ずっと伸びてきたわけですが、この国防費、これからまた10年間伸びていったら、このお金でどういう軍事力が出来るか、その軍事力を中国がどういう風に使えるかというものを計算で出しました。ただそれだけの話です。つまり、感情を排して、このお金で、こういうコンセプトで何が出来るかという、アプローチとしては真っ当ですが、単純極まりない枠組みです。学問的にはほとんど意味無いだろうと思いますが、私のアプローチというのはそういうものです。様々な美辞麗句、レトリックというものを外していったら、中国はどのような形で姿を表すかということを軍事の観点から見てみました。結論は簡単で、西太平洋に海軍は出てきます、というものです。こういう形で出るでしょうということが計算で出るということです。ところが、これがあまりにも真っ当な議論でしたので、専門家の間では非常にショッキングだったらしいのです。と言いますのも、多くの日本の安全保障の専門家は中国のレトリックを分析することが多くて、お金を計算して議論するようなはしたないことはしないということで

す。

何故、そのような私がこの中国近現代政治史という恐ろしいプロジェクトに引き込まれたかというところを説明して、本当の重要な内容に関わるところは全て川井先生にお任せしたいと思っています。簡単に言いますと私が歴史学的なアプローチに関わってしまった背景を言いますと、私の出身はICU、国際基督教大学でございまして、その時に、東大から移られました坂野正高という先生に学んだのがきっかけです。東洋文庫に連れて行かれて無理やり学ばされたのが運の尽きでした。中国語もほとんど分からなかったのに清末の外交文書を読まされていたのが始まりです。他の中国学者と大きく異なり、比較政治学のアプローチを坂野正高先生はしていました。それまでは東洋史の枠組み、植田捷雄先生のような東洋史の伝統を濃く受け継いだ先生の下では、何故、中国研究に西洋の政治学の枠組みを取り入れるのかというところで、非常に強い反発があったと私は聞いています。ですから、例えば、坂野正高先生が若い時に比較政治学の枠組みを取り入れて発表した時に、先生と先輩たちは、1時間の沈黙が続けたと聞いたことがあります。何のコメントもなく黙ったきりだったということです。私が読まれたものといいますが、もちろん『籌辦夷務始末』もありますが、それ以外には比較政治学やそれ以外の分野のテキスト、とりわけ2つ私が覚えているのは、ボールドィング (K. Boulding) という人のイメージに関するものです。人間が歴史を見る上でイメージがどれだけ重要か、政治現象を見る上で認識というものが大きな影響を持つという立場を坂野正高という人は持っていました。その手がかりがこの K. Boulding という人の *The Image* だったと思います。もう1つは、徹底した人間観察をされていたことです。それが分かったのは、国際政治学のリアリズム、現実主義の古典としてモーゲンソー (H. Morgenthau) という人の書いたものがあります (*Politics Among Nations*)。そのモーゲンソーに出てくる主要な引用文献は逐一読まれたのですが、「本を読むというのは参考文献にも目を通して読むんだ」と言われ、素直に「はいそうですか」と言って読みました。その中に神学者の書いた本があり、それが実はモーゲンソーの本の中で非常に大きな役割を果たしていました。坂野正高の授業の

中でもそれを読まされました。キリスト教神学というのは、博愛を説くだけではなくて、人間の弱さ、愚かさ、醜さというものを徹底的に正面から容赦なく分析します。途中でかわいそうだからやめようということはほとんどありません。それが実は国際政治学のリアリズムの基本ではないかと思いました。普通、軍事力を重視するものがリアリズムだというような考え方がありますし、私もそれには反対しませんが、日本人がしばしば忘れているものは、人間の愚かさについての観察というものが途中で終わらないような「粘り」と言いますが、そのようなものが備わっていなければリアリズムではないかと思いました。このようなことから、中国の安全保障を研究する上で、私はこのような立場、つまり、都合の悪いことを決して私は書くのをやめない、自分にその刃が向かってきてもなるべく避けずにやります(ちょっとは避けますけども)。特に安全保障研究をやっていると、日本が負けるシナリオというのはみんな嫌がるのですが、私は日本が敗北して占領された後、中国はどのような政策を取るかということ、事細かに議論するようなこともするという事です。そういうことを考えなければ実は政治研究、安全保障研究は不完全だと思ったので、そのようなことをしているということです。

そういう立場にたち、ミネルヴァで『中国をめぐる安全保障』という本を2007年に出しました。そこでは中国の動きを、国際環境と、それから地域も入りますけれども、特に重視したのが国内の環境です。国内の政治や経済状況というもの。そして軍事と、だいたい3つの観点を組み合わせた本を編集致しました。その縁で、ミネルヴァの人から中国近現代政治史を書きませんかと言われまして、断り、そのまま数年放っておいたのですが、思い出されてしまいまして、「先生、書いて下さい」とまた言われました。1人じゃ書けないので編集の形でいいかということをお願いして、了承して頂きました。そして大東文化大学の内田知行先生に紹介して頂いたのが川井先生です。川井先生と直接お話をしまして、ほぼ私は川井先生と考えがよく似ていたということに気がつきまして、もうこれは私が出る幕ではないかと思いました。川井先生にほとんどの枠組みはお任せした気がします。私が提示したのは2つだけ。1つは縦軸と横軸を使う、つまり事項別分析と時系列の分析を組み合

わせるといふこと。それから2つ目がテキストとして書くけれども、出来るだけ中級以上の、今までの分析にとどまらないようなテキストにしていくということをお願いただけでした。ですから、内容については、私は責任がなく、全て川井先生の責任と言えればよいなと思っておりますが、そうではありません。はっきり申し上げますが、大学院生よろしくコンセプトペーパーを書いて、それで川井先生にかなり強く批判されて書き直すということを経験して全体の枠組みを作ったということです。

とくに田中先生には非常に申し訳なかったのですが、あれはあくまでテキストであって論文集ではない筈だったんです。しかし、執筆者の人はそうは思わず、最先端の論文を書こうという衝動が非常に強くあり、それを抑えるのに実はかなり苦労しました。特に私がこだわったコンセプトで何を強調したかと言いますと、中国の安全保障をやっていると、中国から発信される情報がどこまで本当のもので、どこまで本当のものでないのか区別がなかなかつきません。これをもう少し突き詰めていきますと、中国というアイデンティティそのものがどこまで本物で、どこまでが宣伝のために使われているのかを区別をしなければならぬと気がつきました。どこまでの主張が本気で、どこまでの主張が戦略的または戦術的な目的で使われているのかを区別していかなければならぬということです。そこで出てきた争点が歴史の解釈でございます。私は文革の後期の世代ですので、林彪事件に非常に大きな衝撃を受けました。事件によって歴史解釈が逆転していくところをまざまざと見たわけですが、その経験に基づいて歴史の読み替えというのがどのように行われたのかということを中心にし、そしてそれを理論的に説明するというので一貫性を持たせようと思いました。私の書いた序章と、それから建国から改革開放期までの章にそれが流れているかと思えます。

もう少しだけ話してそれでおしまいにします。改革開放を歴史として見るというのもその頃はまだ早過ぎたかもしれませんが、織り込んでいったということです。何故かといいますと、まだ坂野正高先生が生きていた頃、フランスの中国学者のルシアン・ピアンコが、改革開放が始まった時に、これを19世紀からの長い歴史の中で改革開放を位置づけました。これは西村先生

にも通じるもところがあるかと思いますが、その当時の日本ではそのようなアプローチは殆どありませんでした。こういうような改革開放期を歴史の中で位置づけていく。そこでは読み替えが生じていくだろうということを考えまして、それを試みたということも思い出されるということです。

雑駁なことを申し上げましたけれども、だいたいこういうお話で勘弁して頂けますでしょうか。この後は川井先生により精緻な議論をして頂けると思います。ただ1つだけ申し上げたいことが残っていますので、それを言います。ここにはけっこう若い方がいらっしゃいますので、申し上げます。私のアプローチは非常に広くなってしまったわけですが、それは最初から広くしたわけではありません。坂野正高先生は1980年代の中程に亡くなられてしまいました。大学院生としては非常に悲惨な状況です。自分の腕一本で生きのびていかなければいけなくなりました。それで何をしたかといえますと、中国政治ではたくさんライバルがおり、中国経済も日本では1万人以上専門家がおり、中国史は恐ろしくて手が出せない。軍事・安全保障は防衛省(かつては防衛庁ですね)にはたくさん専門家がいる。みなさんならどうします?私は政治と軍事を組み合わせれば、どちらかには勝てるはずと考えました。政治のグループに行って軍事の話をするのと勝てます。軍事の方に行って政治と軍事を組み合わせると何とかなる。苦肉の策の結果、広がってしまいました。偶然にも中国の動きに非常に大きな変化があり、そして今、西村先生が説明して下さったように、長期的な観点からの大きな枠組での考察が必要になってきたというところに、はまってしまいました。運が良かったかなと思っています。

ですから、私がここに呼ばれたのは、そういう苦肉の策、どうしようもなく生きて伸びるためにやったことの結果、たまたま上手くいったのかもしれないということで、特に若い方には申し上げますけれども、人生、何があるか分かりません。ほとんど私、自分でやろうと思った研究が出来たことはないです。言われた仕事をやらなければ生き延びていけなかったもので、やったら、誰もやってない仕事で、短期間のうちに第一人者になったと言われました。嫌な仕事 came たら「しめた」と思った方がいいということは申し上げて

おきます。非常に雑駁な話になり，申し訳ありません。

水羽：全くきっちり 20 分です。ありがとうございました。では続けて，川井先生の方から，やはり時間は 20 分ということをお願いします。

報告（川井悟）

プール学院大学の川井と申します。お手元にレジユメがありまして、ワープロを上手く使えないもので、誤字があるんですが、それは読んでもらうことにして。2部に分かれています。

本を作る時に浅野先生と色々な話をしたんですけども、結局、ともに20世紀の日本に生きているということが出発点ですね。現代の色々な問題を考える際に、私達よりシニアの人達は、過去の中国だとか、或いは政治状況とか、或いは自分の利害関心とかに囚われる方が多い。特に、ちょっと前の世代は、政治に囚われる方が多いですね。政治の理想とか日本の進路とかを考える方が多いんですが、私たちはそれらからどちらかと言うと距離を置きます。そして、使えるのは科学だと思うんです。科学とか技術とか。そして社会とか人間を見る時も、その時の政治状況とかそういうものから離れた、人間観、或いは世界観、歴史観を作りたい。こういう考えがありました。科学と並んで、民主主義もよく言われます。でも、民主主義について考えると、否応なく、現実の政治に関わりを持たざるを得なくなる。お話を伺っていると、西村先生はネイション・ステイト、国民国家とか民主制とかに拘っておられる。ですから、私よりシニアな世代だと思っています。そして、私なんかより後の世代になると、ますます現実から浮遊しまして、思考の遊戯って言うんですか、そういうところに遊ぶ日本人が増えました。私はその先駆けではないかと思っています。

次に、浅野先生が私に託された『概説 近現代中国政治史』という本についての言い訳をこれから言います。これからあとは『概説』と略称します。まず、高い本なんですけれども、買って下さった、或いは読んで下さった深く御奇特な方、ちょっと手を挙げて頂いたら。一部でもいいです。序章だけでもいいです。「おわりに」だけでもいいです。読んでいただいた方は手を挙げて下さい。ありがとうございます。

読まれた方は、変わった本だと思われたかと思います。中国の歴史書は、ここ数年たくさん出ています。中央公論からも岩波からも東大出版会からも

講談社からも出ています。私が一番面白いと勝手に思っているのは、菊池秀明さんという人の講談社から出ている中国の歴史という本ですね。太平天国の専門家の方なのですが、太平天国の洪秀全から話し始めて、それから次は孫文とか革命家の話をし、その前に洋務運動とかの話がありますね。それから孫文、それから毛沢東、蒋介石とか、西村先生お得意の張学良とかの話をします。事件を構成する人物中心に中国の歴史の大事なところを全部、語っていくんですね。凄く面白い。つまり歴史というのは、元々は人物の行動、事件史です。それを後から評価したり大きな流れの中で述べるというのが歴史書の本流だと思うんです。これを普通の歴史書というと思うんですね。私たちの『概説』の本は違うわけです。歴史上の事件とかは、どっか別の本で読んできなさいと。それを知った上でこれを読んで下さい。こういう本なんです。初めて読まれた方は、そういうところが大変だったと思います。

近頃、いろんな歴史の概説書、「類書」って私は呼んでるんですけども、この10年以内に出たいろんな本は、私たちの先輩たちがかなり大きな道筋や代表的な人物について書いてしまっていて、同じことは書けない、そこで、研究の新しいところを紹介しなければということで苦労されている。岩波新書で、吉澤さんから始まって、川島さん、石川君とか、久保君とか、いろいろ書いておられますが、実は面白くないと私は思ってるんです。つまり歴史の面白いところを、同じところを繰り返すと嫌だから、自分の得意なところを中心に史料に基づいて書くということになると、全然、迫力がないんですね。何を言ってるのか分からなくて。つまり、だんだん歴史研究は進むんですが、その分、細くなるというか問題が細分化されていく。それでおもしろくない。逆に、いちばん歴史を語るときに張り切っているのは予備校の講師じゃないでしょうか。ある程度の事実に基づいて勝手に脚色して、予備校生に好き勝手なことを教えている。生徒は、それが、よく分かる、おもしろい、初めて分かった、というわけです。高校の先生でそこまでやれる先生はないですね。予備校の講師とか、或いはよく売れてる本は、本当に詳しくその時代のことを知らないで、面白いところだけを取り出して、歴史にはこんな面もありますよという。場合によっては、歴史を舞台にして現代人が考え

行動するような説明が売れるんですね。

『概説』はそういう歴史書を全部踏まえて、歴史としてどのようにして考えたらいいのかということを議論しました。「序論」というところで方法論とか、或いは西村先生が10年ほど前に政治空間の本の中で取り上げられた、パラダイムの転換というのをもういっぺん、徹底的に浅野さんにやってもらいました。そして、時系列に、解放前を私と内田尚孝君、それからその次、1949年革命から1978年、毛沢東の死あたりまでを浅野さん、その後は現代のことを軍事から見ている阿部さんというふうに分担して、時代のことをまずだいたい押さえてもらいました。しかし、一章あたりのページ数が凄く少ないんです。当初は、一人あたり30ページくらいだったと思います。のちに、書けないと言った方のページを取ったのと、もう1つはミネルヴァの方に、これは大事だからということでページを多めにしてもらってページ数を増やしました。それでも、私が担当した章は、清のアヘン戦争前後から1937年まで。100年間を40ページで述べるのは無茶苦茶、難しいんです。当初は誰も書けないような要約の決定版を書こうと思っていたんですが、『中華民国史』という中華書局から出た本がありまして、中国の歴史家が史料を元に1つ1つの事件や人物の動静を概説しているその档案の利用の仕方とかを見て、とても敵わないというので、要約の決定版という『概説』は諦めました。それでは、少ないページで、どんな時代別の概説を書けばいいのか。これが問題です。

読んで頂いた方は、いくつか問題を感じられたと思うんです。何故、第1章の川井のところには共産党史が全然、出てこないのか。毛沢東が生まれた話も、共産党の成立も、或いはその前の陳独秀も一切取り上げませんし、井岡山も出てきません。全部それは第九章を担当される田中先生に書いてもらうことにしました。第2次国共合作あたりの話は内田尚孝さんが日中戦争との関係の中で取り上げてくれました。重複を避けたというのが1つの理由ですけれども、私はその時、現実に統治権力を握っている政権と人々の生活世界の中での支配関係の変化が政治史であるというように考えて、後で政治権力を握ることになった毛沢東の生い立ちを辿るようなことはすまいと

考えたのです。例えば、オウム真理教事件の麻原彰晃が、今、天下を取っていたら、麻原彰晃さんの九州での歴史とか生い立ちを全部取りあげて日本史になるかということです。そんなことはない。大事なことは政権を取ってからだというように理屈を付けて、共産党は第1章から除きました。

あと特色としては、皆さんが違和感をもたれたかもしれませんが、参考文献をあまり挙げませんでした。研究文献として、だいたいみんな、こんな本が日本で出ていますよ、或いはアメリカや中国から出ていますよというように代表的な研究書を参考文献として紹介されるのですが、多分みんな全部読んでいないと思います。著者の皆さん、違っていたらごめんなさい。しかし少なくとも、文章の細部にまでこだわって読んでおられないと思います。そうした十分に読んでいないものも紹介されている。私はそういうのは避けたいと思いました。参考書は代表的なもの以外は一切、紹介しない。そして、この人の本だったら信頼してもいいという人の名前しか挙げない。もちろん、そういう人もすべての点で常に正しいわけじゃないし、小さな点はまちがいもある。しかし、人と社会についての史料の読み方、歴史的事実の構成の仕方がある程度考え抜かれているということです。歴史においては偶然的な傑作はありえない。歴史研究者が若い時にたまたま注目されるような論文を書けるのは偶然みたいだが、偶然ではない。それはたまたま言ったことが先輩に褒められて評価されているだけで。本当はいろいろな経験を積み、歴史資料を読んだ経験の中で勘が冴えて、「こう言っても間違いない」ということが言えるという熟年に達して始めて良い歴史が書ける。そして年を取ったらだんだん忘れてきて、もう大事なことも忘れてしまうから、歴史は書けなくなる。そのちょうど狭間の、一番成熟した時に書いた歴史というのは一番勘が冴えていて信頼できる。

先ほど、田中先生が最初に問題提起されて、史料がいっぱい出るようになったということをおっしゃった。その史料の扱い方、或いは研究者としての自分の立ち位置、考え方、問題意識、視角の決定について、私は今の日本の状況というのは、史料がたくさん利用できる可能性が増えたとはいえ、却って危ういと思ってるわけです。日本が危ういだけじゃない。世界中が危うい。

或いは史料を使えないくせに使ったふりをする駄目なのがいっぱいいると
思っているんです。また、後で言いたいと思います。

今まで言ったのは、ハンドアウト前半の「『概説』の编者として」の言い
訳のところ、この『概説』という本がどういう特色を持っているかという
ことをかいつまんで言ったわけです。それではたくさんあるレジユメを頑張
って、あと5、6分で全部言えるようにします。

中国の20世紀の1920年代から1980年代ぐらいまでの政治の歴史を考
える時にですね、どういうことが言えるのかということと共に、それを支え
る歴史の研究の仕方ということまで、私の考えを述べたいと思います。2の
「私の、いくつかの論点」からです。いくつか論点を言いますが、全部言っ
ていると大変なんで、いくつか飛ばして簡単に言います。まず1)の(1)、
「中国は資本主義かどうか」。私は形は資本主義だと思っていますが、内容が
資本主義かどうかは資本主義の定義によるとと思っています。定義によっ
ては社会主義ともいえる。要するに、まず、定義をはっきりさせましょうと
いうことです。(2)については、これは西村先生と議論したいと思います。ネ
ーション・ステイトのグローバルなルールがあって、その枠組の中に中国は入
っているから、それに入るというなかではネーション・ステイトビルディ
ングの歴史なるものを、どのように迎るか、どう変わっていくかというふうな
捉え方をされていますが、ネーション・ステイト、国民国家と私は言うん
ですが、その定義の仕方が問題だというのが私の考えです。中国の2000年
の歴史を見ると、中国というのは昔から、他に強い勢力があったら、例えば、
北から攻めてくるような少数民族の勢力があったら中華というのを意識し
ますけれど、他に強い勢力がなかったら「中華」なんて特に意識する必要は
ないのです。いろんな群雄の勢力があったら、その時は「国」なんていう言
葉も使われる。言葉というのは非常にややこしいですね。日本人は「国」と
いう言葉を中国から借りてますし、中国でも「国」という言葉が昔からある
から混同されるんですけども。

「国民国家」とか「国」とか「ネーション」とか或いは「ステイト」とは
一体何なのかという定義を歴史的にやらなければいけないと思っており

ます。私の考え方は(2)に述べてある通りです。「国民国家」というのは近代ヨーロッパに出てきたものだった。それは名前じゃない、或いは国民とか領域とかじゃなくて、何をすることが大事である。支配の仕方、統治の仕方が大事で、例えば、支配領域の人々の、人口調査や、人をある程度掌握して、どんな政策をやるかによって国民国家になるのではないかと考えています。これはまた、議論したらよいと思いますが、こういう定義から入るべきだと言っているのが(2)です。

また、どうして中国はまとまったのか。或いは何故、1つ1つの省に分裂しないのか。或いは分裂と統一を繰り返すのは何故か。あとで、金子さんのお考えを聞きたいところですけども、どうして中国は昔から1つの政権だったのかは謎です。

2)「中国社会を説明する社会科学は・・・西欧などと共通なのか」にいきます。西村先生が、『概説』は中国異質論を言っているのではないかというお話でしたが、歴史や社会を説明する場合に普遍性は必要だと思っているんです。ただ、今のところ、十分共通の分析装置を社会科学は生み出していないと私は思っております。社会科学もっと頑張れということですね。ほんとは私がやりたかったんですが、もう寿命が来そうです。

3)「政治とは何か」で書いてあるのは、『概説』の第一章で何を取り上げたかということに関わってきます。私はマックス・ウェーバーの考え方を利用して、人を支配する、それを政治と同義に使っておりますので、社会のトップの方や国のトップが何の政策をやるというような意味だけじゃなくて、社会の各レベルの小さな世界でも、人が人に影響を及ぼし支配するというのを全部、政治と呼んでいるんです。ですからそれを全部解明できるのが政治学なんじゃないかと思います。そして、中国は昔から政治の世界だというように思っています。経済の加藤弘之君は、時々、中国の経済制度を問題にして、曖昧なのが問題で、市場が十分に独立して働かないとかいろいろ言っておられますけれども、中国は昔から経済も政治も分けないんです。経済面でも政治の力を使って自分を有利にするっていうのは当然です。元々、生きていくためには、みんな、人が人に影響を及ぼし、影響されるという意味で、

政治の世界に生きています。その中で 2 億の人を支配するか、10 億の人を支配するか、4000 万の人を支配するか、或いは 100 人の人を動かすかの力学が違っただけなんです。

次に、4)「統治 = 支配の正統性」にいきます。西村先生の本には、正統性(legitimacy)という言葉がいっぱい出て来るんですが、「正統性について調べなさい」というので、ある辞典を引きましたら、マックス・ウェーバーに行き当たりました。社会学の用語での正統性、支配の正当性という説明が多かったのですが、支配を続けるためにコストを安くする技術が正統性という概念だという説明もありました。私は、正統性という際に、それが表出され言説に載せられる時、4)の第1、第2、第3に書いたように、それが実際に表出されたとしても、それは極めて偏った面しか反映していないから、人々が無意識のうちに従っているような実際の支配の正統性を実証するのはかなり難しいと思っております。理論的な考察もいるし、それを実証するための方法が必要だと思っています。

5)「制度とは何か」は、浅野先生がドイツとスコチポルを挙げて、歴史的制度論というのを仰っておられるかと思えます。私は歴史的制度論に近い考えなんですけれども、社会学者のスコチポルとはまたちょっと考え方が違う。物理学の考え方のアナロジーで説明しますと、ヒッグス粒子のように、空間と力というのは相関連していると思ひまして、制度というのは結局、人が人に影響をおよぼすのが政治だとしたら、人に影響を及ぼす時に、合理的な行動に抵抗し影響を与えるようなものが制度だと思っています。制度の中にはいろんな制度がある。強さも弱さも歴史的にもいつ出てきたとかいろんな制度があって、そしてそれが持続性を持つ時、制度として意識されるわけですね。そんな理屈を理論的に5)に述べました。

5)の(7)~(8)は、歴史的な制度を考える時に、スコチポルの議論に対して私の考えを説明していますが、要するに、例えば中国の家族の中で、或いは、近隣社会の中で生きている人が、その時に考えられる一番合理的な、自分の利益になるような行動を取るとする。無意識的にとるとする。その時に、そのような行動をそのままの形で取らせないような力が働いたら、これ

は政治の力が働くか、或いは政治の力が見えない時には、制度的な力が働いてるんじゃないか。それを「制度」と言う。そんな話です。別に辛亥革命の時の話だけじゃなくて、共産党が政権を取った時でも、人々の末端のところ、人によっては政治の領域じゃなくて社会の領域だと言うんですけども、末端の領域で、政治の働きかけに対して、人々に影響を及ぼすものがある。昔から全然変わらないようなやり方、或いは制度が残っている。それがいつ頃変わるんだろうか。それが地域社会であり、地域社会の諸制度要因である。もちろん、省とか地方ごとにもある。更にいろんなところから代表が来て、全体の政治制度の仕組み、外に対して政権をどう争うかというような議論になった時に、それをどのようにまとめるかというのが変革を論じる際に制度論が論じている領域だと思うのです。ハンドアウトではここまでは展開していませんけれども、そういうふうには制度というものを考えています。

最後の6)「史料の扱いと歴史学」は、先のお2人があまり言われなかった史料のことについてです。ここで言いたいのは次のことです。田中先生は、1980年代以来、中国の方で档案というものの管理のやり方、つまり歴史資料と現用資料がどのように分けられるかはっきりしたので、これからは、いっぱい出されている史料を利用した歴史研究がやりやすくなる可能性が大いに広がると仰ったのですが、可能性が広がると共に、逆に危うさもあると思うんです。中国の正史執筆は次の時代の民間知識人がやるんですけども、唐の時代の太宗がいろんな学者を集めて、五胡十六国史をやったのは、次の時代の王朝が前の時代のことを執筆することになったので、歴史を歪めるものだと歴史学者の間で批判があるそうですね。それと同じことを共産党の人がやったら、これは歴史を歪めるものになるという意見が出て来ると思うんです。それは何故かと言ったら、そこに当然、作為が入る、改竄が入る。或いは「これは出す」「これは出さない」という選択がなされることで歴史が歪むということです。档案を使った研究について言えば、私は档案をいい加減に使った研究はほとんど意味がないと思っています。編纂された档案は読んでもいいと思うんです。しかしながら実際の文書にあたってですね、これが原文書だとか会議録だとかいって、それを事実というふうにするのがそ

もそも間違ってると思ってるわけです。可能性は広げたが、危険性も同時に広げて、そしてそのままそれを信じて研究したら、危険性の罠にかかってしまう。歴史を歪める。或いはテーマを矮小化する。何のために研究するのか分からない。こういう危険があると思っております。だから、たまたま論文が出て何かを実証したとしても、レフェリー制度が今の日本ではいい加減で、その参考資料とか档案史料とかを全部点検して、レフェリー出来る人が日本ではないと思う。指導教授もそこまで出来ないから、そういうのを利用した研究っていうのは、本当に質が保たれているのか。或いは、実証されていても、それが果たして本当に意味があるのかどうかというのは難しいと思います。これは史料を読む力量の問題、或いは人間を理解する力の問題もあるんですけどね。岡本隆司さんと吉澤誠一郎さんが『近代中国研究入門』という本を出して、そこで、今の大学の教育では十分、若手に教育が行われていない、読む力がないと言っておられます。先程、浅野さんが言われた坂野先生のような偉い先生がだんだん少なくなったと言って嘆いておられますが、まだあの議論には足りないものがあると思います。人間の理解が足りない。

1つ雑談いたします。私がびっくりしたのは、東洋史の先生の中には、セックスの仕方を本から学ぶ人がいるわけですね。昔の人が書いた、偉い人の本や、いろんな生活のことを書いた本から学ぶわけです。日本の旧制中学や高校のエリートたちが読む古典の中には庶民の習慣を伝えてくれるものなど滅多にない。そこで、たまたま見つけた本の知識と学校時代の先輩や同級生の話と、結婚してからの奥さんや子供たちの話で人間理解の世界が完結している。そして、それを歴史上の人間理解に適用したのではないかと思うのです。つまり、昔の学者は世界が狭いと思ってます。今はいろいろな世界の情報が流通している上に、活動領域も広がっているわけですから、実践して、そこでいろんな体験をして人間理解を深める。そうでないと、行間を読んだり、書かれている日記や回憶やその他のいろんなことの内容が分からへんと思います。だから、『近代中国研究入門』という本は、昔の東洋学の先生方の勉強法をもっとせよと警鐘を鳴らしておられるんですが、私は、もっと幅

広くいろんなものを読み、いろいろ体験せよと言いたいのです。坂野先生がボールディングとか、キリスト教の本を読みと言われたのは流石だと思ったんですけども、さらに、いろいろな世界を見、いろいろな人とつきあう、そういう勉強が大事かと思いました。すいません、3分程超過しました。あとは本を読んで頂いたら。所々誤植があって申し訳ないんですが、言いたいことは言えてると思います。ありがとうございました。

水羽：時間制限の件、そんな真剣に言ったつもりはなかったんですが、かなり無理してまとめていただきました。この間、討議の時間を確保したいと思い、質問は一切、取らずに進めておりますが、個別の報告に対する質問、或いは大きな問題に対する意見を質問用紙に書いて頂いて、それを第2部の土田先生のほうでまとめて頂きながら、全員で議論できればと考えております。続けて、コメントということで、瀧口先生、宜しくお願い致します。一応15分ということで。

ディスカッサント（瀧口剛）

瀧口と申します。顔見知りの方もおられますが、多くの方が初対面になります。私の専門は日本政治史でありまして、そういった人間が何故ここにおいてコメントするのかということですが、最大の理由は田中先生が誘いやすかった同僚に声を掛けられたのではないかと思います。ただ2番目の理由を考えますと、中国政治史、或いは中国史を専門にしていない人間が両著を読んだらどういう感想を抱くかを聞いてみたいと思われたのではないかと思います。そこで日本政治史を専攻している人間が、中国政治史に関する叙述を読んでどういう感想を抱いたのかということを中心にお話をさせて頂きたいと思います。

私は日本政治史を専門としている訳ですけども、育ちでいきますと法学部で育ってきました。その中で政治史をやってきたわけですね。しかし中国政治史については十分な知識を得る機会がなかったので、所詮その程度の人間のコメントだと思って頂ければいいかと思います。しかし、1つ共通することは対象となる地域は異なるけれども「政治史」であるということですね。これはしばしば考えるのですが、政治学の1ジャンルとしての「政治史」というのは何なのだろうということですね。これは実を言うと一筋縄ではいかない難しい問題を孕んでると思います。端的に言って政治学と歴史学の間には、緊張関係がある、それを中国政治史の場合で考えるとどうなるかということを少し述べてみたいと思います。

まず両著を読んだ感想を述べたいと思います。西村先生の御本はですね、非常に見事に統一された記述が印象的です。著書全体が非常にシメトリカルな構図をもっていて、さらに非常に分かりやすい図表が掲載されていて。これを見ながら中の記述を読んでいくと非常に頭に入る、見事な教科書だなと思いました。全体を貫く観点としては恐らく中華民族的の国民国家形成史が太い線としてある。その中で25年ごとに時期区分がなされている。何に基づいて時期区分しているか、というと「政治空間」という独自の概念を持ち込まれてる。おそらく正統性の問題を非常に重視する結果として「政治空間」

という概念を創出されたのかという気がします。他方でこれは概念なのか、メタファーなのか、読んでいて疑問に思わないわけではないのですが、いずれにせよ「政治空間」によって時期区分したことが統一的な記述を可能にしたという感じを受けます。一方、浅野先生と川井先生の編まれた御著書は、様々な研究者が多様なアプローチ、特に社会科学的な分析道具を用いて、個々のテーマについて論じられています。「普遍の中の中国」という問題意識と同時に、中国政治史をめぐる多様な研究状況が分かったことが興味深かったです。

ところで、両著に共通の問題意識としては、革命史観批判があるように思われます。これはひょっとしたら現在の現代中国政治史研究者のコンセンサスなのかなと思います。ここから連続性の問題、時期区分の問題が出て来るということになります。特に印象を受けたのがですね、中華民国と人民共和国という時代を連続性の面で見るということが強く意識されてるようです。この点はまた考えてみたいと思います。もう1つは社会科学上の概念がやはり用いられてるということですね。西村先生の本にも持ち込まれてるわけですね。比較政治学的な概念が適用されてるということになります。これは両著も一緒かなと。そういうことを踏まえて少しですね、政治史における連続性の問題や、社会科学的分析の問題を少し考えてみたいと思うんです。

まず時期区分と「連続」「断絶」の問題から。政治史をやるとですね、だいたい区分というのはやることによって概説的になるんですけども、日本の場合は常識的に言うと近世と近代、要するに江戸時代までと明治以降、戦前と戦後ですね。そういう風に大きく言うと区分してますし、私も授業ではこういった区分を用いますけども、これはしかし、断絶してるという議論だけかということ、もちろん、これにチャレンジする議論もいっぱいあるんですね。近世の遺産が近代にどれだけ持ち込まれてるかという議論もいっぱいありますし、戦前と戦後は例えば1940年体制論というようにですね、戦時体制の問題とかですね、連続・非連続の問題はしばしば議論になるところであります。この場合ですね、何をもちて連続してるか、断絶しているかということになります。これはものの見方で「この観点から見れば連続してる」「こ

の観点から見れば断絶してる」という風になるのは当然なんですけれども、読ませて頂くとですね、1949年で連続していると言う場合は国民国家化の進行を重視されているようです。しかし、体制の違いを軽く見て良いのか、疑問を感じないわけではありません。何を基準に時期区分をするのかはやはり難しい問題のような気がします。政治制度が異なるとそこで展開されるゲームのルールも違っているはずで、そこを無視すると実証的な研究の発展が逆に阻害される可能性もあるのではないかと、このような感想もいただきました。

それから、もう1つの問題として。歴史分析と社会科学的分析との関係があります。もちろん、歴史に限らず何の分析でもフレームが必要で、生の事実を並べてですね、そんなものが何の分析にもならないのは当然であります。意識的に社会を比較する場合に出てきたのがですね、歴史社会学の分野ですね。フレームを意識的に作ってですね、比較するというをやってきたんですね。先程言及されましたスコッチポルなんかもそうで、これはしかしですね、歴史学ではないと思うんですね。政治史学、歴史社会学は歴史学ではないと思うんです。「歴史学」は、「歴史社会学」「歴史政治学」(篠原一先生とかはこういう言葉を使われてる)とは少し違う。それは社会科学は一般化する。スコッチポルも一般化してます。別に中国だけを取り上げたんじゃないんですね。旧体制はどういう場合に崩壊するかという議論をしています。しかし歴史学はですね、私も学生には「史料を読め」と言います。「難しいことを言うより、まず史料から読め」と言いますが、これはやっぱり個別化への志向があると思うわけですね。社会科学の一般化への志向と歴史学の個別化思考とは緊張関係がなくなると思いますが、だからさよならと言うわけではないんですけれども、なくなるとは思いません。緊張関係は存在する。これは適用する時は意識しておいた方がいいだろうと思います。もう1つ歴史学はですね、内在的な分析が必要であるということですね。社会科学における客観化と歴史学的な主観とかを扱う内在的な分析とはですね、やはり緊張関係にあると思っておいた方がいい。これは解決の付かない問題だと思えますけれども、意識はすべきだろうと思います。

もう1つ気になったことを挙げますと、社会科学の概念を使うという時の問題であります。ちょっと感じたんですけど、概念を「当てはめている」という印象を受ける時もあります。これはどうしてかなと考えたんですけど、2点考えないといけな。1つはですね、全体主義とか権威主義体制とかですね、こういった概念は元来は問題的な、プロブレマティックな問題であった。冷戦時代というのはこの概念自体が激しい論争の対象になっていたということは、古い先生はご存知だと思います。だから、リベラルな学者はですね、恐らく全体主義って誰も使わなかったと思います。要するにナチズムとスターリニズム、社会主義を一緒にしているから。しかし、これはですね、例えばこの全体主義論の主要な人物であったハンナ・アーレントの思想を考えてみたらいいんですけども、非常に切実なんですね、20世紀とは何かを考える時に全体主義という概念が必要だった。もちろんクリティカルにですね、必要だった。非常に切実な問題意識がある。ハンナ・アーレントになると生きるか死ぬかの問題意識だったわけですね。ところが、冷戦期が終わりましてですね、それでも、むしろ全体主義を巡るこういった緊張関係が失われてしまったような気がします。

もう1つが純粋に比較の問題ですけども、全体主義もそうですけど、比較するための概念として開発されてきたというものです。しかしこれはですね、自明ではないと思います。自明ではないと言うと変ですけど、どんな権威のある学説でも自明ではない。だから、当てはまらないものを無理矢理に当てはめてもですね、意味が無い。比較政治学とか比較の社会科学はこういう時にどう対処するかというと、新しい類型を作る。これによって概念自体が革新されてしまう。例えばかつてはウエストミンスター型のデモクラシーが当然だったと思われてた時に、ヨーロッパ大陸のリプレゼンテイティブな代表制の概念というのが、「これがもっとノーマルだ」「例外ではなくてノーマルだ」という説が出て来るとですね、新しい類型論も出て来るんですね。だから、中国も比較の対象となるような新しい類型論ができると面白いなと、そう思ったりもするのであります。

以上はマクロな、一般的な話ですけども、もう1つですね、ミクロな分析

というのもやはり重要で、これは政治学上では政治過程論とか政策決定過程論的な話ですけども、これは日本政治史に強い影響を与えていると思います。つまり、これは直感的に分かるところがあるので、日本史の人もこれに近い分析をする。有名な人でいうと坂野潤治さんとかですね。過程論的な分析には実証的な分析、歴史の史料を組み立てていくような分析と親和性があるんだらうと思います。しかし、これは当然、批判もされるところであります。要するに、話がチマチマする。両著でこういう分析があまり見受けられなかった理由は、教科書的に大きく記述しないといけない、あまり前面には出ないのかなという印象を受けました。しかしもう少し重要なことがある感じもします。それは、例えば、毛沢東対蒋介石の二項対立というよりは、多様なアクターが登場し、その間の政治的なゲームが展開されるという話になります。そういった多元主義は現代日本政治分析に古くから言われてきたことですけれども、もっと意識してやった方がいいんじゃないかと思いました。多元的なアクターがあってその間にコアリションと対立のゲームが展開されている。こういう分析がもっと必要ではないかという印象を受けました。この政治過程分析の後ですね、制度論が登場し、そのうち歴史的制度論、合理的選択制度論が政治学分析では出て来るわけですけども。

さらに言えば「制度」については、御著書のなかでも言及されているのですが、もっと精密に分析する余地があるように感じました。歴史的制度論は、例えば福祉国家のメカニズム、何故ある現象がトレンチするのかとかですね、いうのを割と厳密に分析するのにも使われるはずで、やはりこれはキッチリやると良いだらうと思います。そういう意味で言うと、例えば福祉国家論なんかでは制度論はよく使われますけども、読まして頂いて政治経済学的な分析、ポリティカル・エコノミーの分析が欠けているというのが印象です。もちろん経済的な現象は扱われているのですけども、そしてポリティカル・エコノミーは経済学者もやってるし政治学者もやっている分野です。もしやられてないのだったら若い皆さんは挑戦してみるみる価値がある。恐らくこれこそ、本当に中国の体制はですね、市場と旧社会主義の枠組みを使っているので簡単にはいかないと思いますけども、当然、実証分析は出来るだらうと

思います。

予定の終わりまで進んでいないのですけれども、時間がなくなっていました。申し訳ありません。レジメにもあるように 20 世紀の中国における「国民国家」や「権威主義体制」の来歴と今後の展望との関連について、私の方から質問することもしたかったのですが、残念です。

最後にここには若い院生も結構来ておられるようなので、アジテーションをしておわります。教科書は、ある時代のある分野の学問的状况を反映したものです。そこで若い院生諸君には、教科書を鵜呑みにするよりも、チャレンジする気持ちでいて欲しいと思います。例えば西村先生の教科書の統一性のある記述は大変見事だと思うんですけども、そして恐らく生涯をかけた研究の総括もされているんだろうと思って大変感心するんですけども、若い皆さんはやはり、大変失礼な言い方ながら、「打倒西村」を目標に「こんなに誤魔化されるな」と思って研究された方が宜しいかと思います。やがてあなた達が歳を取ると、新しく持ち込んだ手法を今度は学生が勉強する。そして打倒誰々と言われるようになって下さい。

水羽: ありがとうございます。私の方で制約したので充分出来なかったところもあるかと思いますが、引き続き金子先生から宜しくお願い致します。

ディスカッサント（金子肇）

広島大学の金子でございます。恐らく、主催の東洋文庫政治史資料研究班の方から誰も出さないのは拙いだろうということで、この役を仰せつかったのだというふうに想像しています。ともあれ、時間も限られておりますので早速レジュメに即してお話をさせていただきます。

レジュメの最初に「『政治史』と銘打たれた近現代史概説書の登場」というふうに書いています。考えてみますと、これまで概説書・教科書の類で「中国近現代史」とか「中国近代史」というタイトルを付けた本は数多くありました。しかし、「何々政治史」というタイトルを敢えて付けた本が今までどれだけあったらうかと思って調べると、かつて池田誠先生が『中国現代政治史』という本を1962年に出されています。あのご本を概説書と言っているかどうか分からないのですが、その後、タイトルに「政治史」と冠した本があったかということ、にわかに思いつかないのですね。これはどういうことなのだろうかと考えてみると、最近の東アジアや日本の情勢を意識しつつ思い浮かぶのは、これまでの中国史研究、とくに近現代史研究が〈国家〉というものを軽視してきた結果ではないのかという点です。

昨今の中国は、〈国家〉として強大化し非常に強い自己主張をしつつあります。そして、それに呼応するかのように（そればかりでない内在的な理由もあるとは思いますが）、日本においても戦前に回帰するような〈国家〉主義的主張が非常に強くなってきている。そうすると、中国史研究は、こうした現状を過去から歴史的に把握する方法を有しているのか、という思いが沸いてまいります。われわれは、これまで〈国家〉を軽視してきたことのしっぺ返しを喰らっているのではないのでしょうか。

たとえば、本来、「革命史」というのは国家論を伴って初めて「革命史」たりうるのだらうと思うのですが、両著が克服の対象としている「革命史観」に基づく研究は、いわば国家論なき革命史でした。そして、その「革命史観」が克服され現在に至るまでの研究を眺めたとき、われわれが〈国家〉をどこまで研究対象にしてきたのかということ、これまた極めて怪しい。今日の中国

近現代史研究では、もっと新しい分野に若い研究者の人たちが向かってしまい、むしろ国家史は敬遠されてきた経緯があるのではないかと思います。国家史というと、アナクロな政治史とイメージする向きが多いような気がしますが、中国近現代史研究において国家史というジャンルが古めかしいかというと、必ずしもそうではないと思います。昨今は様々な新しいジャンルに研究が分散していますが、たとえば日本史研究のように、それ以前に国家史研究にも十分な蓄積があって、その上に新しいジャンルの研究があるのだろうかと考え、中国史研究の場合、そうではないだろうと思うのです。国家史は深められもせず、ただ放置されてきたといつていい。そのように考えたとき、国家史を基軸に据えて政治史を構想することは、むしろ現在においてこそ重要な意味があるのではないのでしょうか。

そういう点から両著を見ますと、〈国家〉への注目という視点が非常に強く打ち出されていることに気づきます。西村先生のご本は、対内的・対外的国家支配の正統性の変容に注目しながら国家に視線を注がれている。他方、『概説 近現代中国政治史』の方は、国家統合と国家形成、或いは国家としての統合と分裂というところに視点を定めて政治史を構成しようとされている。そういうところが、〈国家〉に注目した場合、両著の特徴として指摘できるのではないかと思います。以上に述べた点が、両著を読み終えたときの感慨だったのですが、以下ではその感慨を踏まえ、2点にわたって問題を提起してみたいと思います。1つは、自分の研究関心に即してということになりますが憲政・立憲制の問題。それから2つめに、先ほど日本史がご専門の瀧口先生がお話しされて、私なんぞが言うことじゃないなと思ったのですが、もう少し大きく問題を拡げて、日本史の政治史研究から私がイメージするところの方法と比較する中で、両著に対してどういうことが言えるのだろうかという点についてお話してみたいと思います。

では、レジュメの「近現代中国政治史・国家史と憲政」というところに入ります。先ほど言ったように、近現代の中国政治史、或いは20世紀の中国政治史を〈国家〉を基軸に据え、その上で憲政ないし立憲制の問題を両著がどう扱っているのかという点に注目しますと、両著の対照的な面が浮き彫り

になってきます。ここでは憲政・立憲制の問題の中でも〈議会〉に注目したいのですが、〈議会〉には政治史分析上の意義として以下のような論点があると思います。野村浩一先生が書かれていることですが、近現代中国の政治勢力は「立憲主義的な拘束」を受けている、いわゆる軍閥であろうと「民意の代表」であるということを中心しななければならない、そういう観念に拘束されているのだということを強調されています。では、「民意」を表出し担保する存在とは何かということ、近現代中国においてはやはり〈議会〉ということになってきます。つまり、支配の正統性の根拠は〈議会〉に収斂するということです。たとえば、北京政府の時代には「法統」という政治的理念、即ち臨時約法に基づいて成立した国会が、その政権の正統性を担保するのだという理念が効力を持ち続けたという経緯があります。

さらに別の点から見ますと、たとえば統治形態、ここでの統治形態というのは、レジュメに書かれているような中央統治権力の制度的な構成を意味しますが、その統治形態から〈議会〉を捉えたときに、〈国家〉と〈国民〉とを結び合わせる制度的な結節点という意義があるように思います。そうすると、国会は国民的・国家的なアイデンティティ形成の契機になるとか、国民形成の制度的なステージになり得るのだろうと考えられるわけです。以上のような〈議会〉に関する論点は、先ほど私が整理した両著の〈国家〉に注目する視点と関わる問題だと思うのです。ところが、西村先生のご本の方は支配の正統性から議会とか憲政に注目しておられるのですが、浅野先生と川井先生のご本の方は、議会とか憲政の問題に着目した章がなく、それらに対する視点が非常に希薄のように感じられます。これは、どうした理由からなのか、この点を少々疑問に感じました。

中国近現代史研究において、これまで憲政の研究は多くは運動史として展開されてきたため、〈国家〉を軸にして歴史を描くと運動史は組み込みにくくなるという点が理由としてあったのかな、ということも考えられます。しかし、私は「憲政運動史」ではなくて文字通り「憲政史」という観点から、中国の近現代政治史を再構成することも可能ではないかと思っています。議会史を基軸に据えた憲政史、或いは憲政史を中核とした政治史・国家史の可

能性もあるのではないのか、ということです。

たとえば、これは私の現在の問題意識なのですが、議会権力の強化を民主の制度的強化と同一視してしまう立憲的志向が、辛亥革命を契機として近現代中国では持続していく傾向が強いと思っています。当然のことながら、その対局には逆に執行権を究極まで強化しようとする志向が随伴するのですが。私の見るところ、近現代中国では西洋的議会制に幻滅した次に、たとえば孫文の国民大会とか共産党の人民代表大会とかのように、究極まで議会権力を強化するという、主観的には民主の究極の形態を創出するのだという構想が現れてきます。しかし、それでは執行権の自立性と主導性が確保されないの、それらの構想において本来「至高の権力」たるべき議会権力が擬制化される方向へと歴史は進んでいく。そういう流れとして、中国憲政史は捉えられるような気がします。そうすると、中華民国から人民共和国への連続性が憲政・議会の問題に注目して見えてくるのではないかと、という見通しも出てくるわけです。ここでは、私の見通しがどうこうという問題ではないのですが、両著を読ませて頂いたとき、憲政・立憲制の位置づけが対照的ではないだろうかという点にまず興味を持ちました。

次に2点目、レジユメの「政治史研究の方法をめぐって」というところです。私は、日本史の近現代政治史研究の論文・著作を読むと本当に面白いと思うのです。私が面白いと感じるのはどういったところかという、日本史の政治史研究が、社会・経済の過程や構造から相対的に独立した文字通りの「政治的世界」を、直接の分析対象としているところにあるのではないかと思います。この辺りご専門の瀧口先生にもぜひご意見を頂けたらいいのですが、ここでいう「政治的世界」についてもう少し説明しますと、一定の制度及び制度運用を背景にして、権力・政府、人的関係、政治家の政治理念や思惑が複雑に交錯し抗争し提携し妥協する、その結果として政治的合意が形成されて国家意思が確定していく過程と構造が、日記・書翰・編纂文書などを駆使して論じられる、そういうところに日本史における政治史研究の王道があるように専門外としては感じるわけです。入手しやすい手頃な概説書として、坂野潤治さんの『日本近代史』などをお読みになれば、私の抱いた

イメージがご理解頂けるはずで。

中国近現代史研究においても、『蒋介石日記』が公開されたことに象徴されるように、今後、日記や書翰類を駆使した分析が可能になってくると思います。しかし、当面の間の政治史の方法や枠組みについて考えた時には、さしあたり以下のようなことが言えるのではないかと思います。近現代中国において、一定の制度及び制度運用に基づく安定的な政治的意思決定のプロセスを確立することは容易ではありませんでした。さらに、中国は日本と違って国家意思の決定に「地方」、そこには色々な勢力が想定できると思いますが、ともかくも国家意思の決定に「地方」が参与する、ないしは介入してくるという政治的伝統があると思うのです。そこに民国期の政治的割拠状況が加わってくると、先ほど述べたように、なかなか安定し確定した制度運用は成り立ちえない。そうすると、日本史のような「政治的世界」の研究はまだまだ難しいところがあるような気がします。そこで、そうした問題関心から両著作を読ませて頂いて面白いと感じたのは、浅野先生と川井先生のご本で、川井先生が統治体制を「政治構造史」として分析するという言い方をされている点です。しかも、大衆の「生活世界」にまで視野を広げて、政治構造の史的展開を論じるのだと述べておられます。

川井先生と似たような発想は実は私も持っています。レジュメに挙げている参考文献の1番下の文章に書いたのですが、その発想とは「社会構造史的な政治史」或いは「社会政治史」と称しうるような、要するに中央と地方、或いは中央もしくは地方の政治的展開を社会・地域の構造・動態・反応との相関関係の中で分析していくという方法・枠組みです。そうすると、日本史と違ってマクロ的ではありますが、その方法・枠組みの中で国家意思形成の問題も組み込んでいけるのではないかと思います。当面、中国近現代史研究における政治史分析・国家史分析は、川井先生の「政治構造史」や私の言う「社会構造史的な政治史」「社会政治史」のような方法的枠組みの中で進んでいくのではないのでしょうか。

ただし、日本史の近現代政治史研究、とりわけ「政治的世界」の独自の分析手法に、われわれは学ぶ必要がないんだということにはなりません。確か

に、先ほどお話したような点で、中国と日本の政治的構造は異なっています。しかし、これまた私が現在抱いているイメージなのですが、中華民国期は、むしろ先ほど述べたような「地方」が国家意思決定に参与・介入してくる政治的伝統を排して、何とか中央に統治権を一元化し、その下で国家意思を確定する西欧的な国家構造に向かおうと努力する、そういう時代だったと考えられます。その志向性が国民政府期に一定の進展を遂げ、「中央化」が進んでいくということにもなるわけです。そういう志向性を持った時代であるからこそ、日本史の「政治的世界」を独自に分析していく方法にも学び、研究を深めていく必要があるのではないかと思うのです。

雑駁な意見ですけれども以上です。

水羽：ありがとうございました。